

## 序章：デカルトへの接近

ぼくがデカルトを知ったのは、高校の世界史の授業でした。教科書にその名が上がっていました。先生の講義で、中世社会の支配下にある人々を宗教的な思考の軛から解放し、人間の持つ理性の開放に努め、その活躍の場を与える思想の原点になった人だ、と教えられた記憶があります。

ぼくが通っていた高校はすごいところで、後に政界や官界のトップになった人たち、経済界で主導的な役割を担った人たち、学問の世界で目を見張る業績を上げた人たちなどが卒業生に名を連ねていました。

授業中の“内職”も桁外れで、マンガを読むなどというレベルのものではなく、発見した先生も発しようとした言葉を呑み込んでしまうようなものでした。ある先生がぼくのよく知っている友人の“内職”を発見し、読んでいる本を取り上げました。

その本は、ぼくの記憶では「実存主義とは何か」というタイトルだったと思います。当時思想界の花形だったサルトルの哲学を解説した本だったと思います。先生は黙って本を返し、何もなかったかのように授業を続けたのでした。

高校生と言っても、そんな人たちが周囲にうようよしていたのですから、ぼくなどはレベルの低いことで大騒ぎをしている、意識の低い高校生だったという訳です。今でも、場違いな所に入り込んでしまった自分の姿が思い浮かんできます。そんな訳で、ぼくがデカルトの名を知っても、受験科目の世界史の一部分くらいにしか認識しませんでした。

高校を卒業した年の夏、歴史に残る“60年安保闘争”がありました。その後の日本の高度経済成長を引き出す結果となった「日米安全保障条約改定」を巡る左右の政治勢力の闘争です。左翼思想が時代精神の大きな部分を占めていたこともあり、学生運動が盛んな時代でした。

その頃、ぼくは大学受験に失敗して浪人の身にありました。そんな分際でありながら、友人とともに国会を取り囲むデモに参加したりしていました。そんな時代の流れの中で1960年6月15日が来ます。樺美智子さん死亡事件が起こります。デモ隊と機動隊との揉み合いの中で将来を嘱望されていた23才の女子学生が命を落したのです。

若者の常として、権力に対する反発感が高まっていくのは当然のことだったのでしょう。ぼくもその頃から左翼思想に傾いていったのでした。弁証法や唯物論哲学を学び、観念論批判の議論を始めたのもこの頃からでした。

そして、翌年には運良く大学に入学することができました。理系に入学したのですが、思想や哲学に対する関心は衰えることはありませんでした。意気揚々と哲学や東洋史の授業を受けていました。もちろん、当時の普通の学生としての遊びにも存分に浸っていました。

ぼくが受講していた哲学の授業の主題は、カントの哲学を中心とした認識論でした。ぼくの関心は相変わらず弁証法的唯物論や史的唯物論にありましたから、授業にはきちんと出ていましたが、批判的な姿勢で受講していました。

そして期末試験の季節がやってきました。課題が発表され、試験当日にこの課題に関わる論文を試験場で書くことが課せられました。課題は「認識論について論じよ」というものでした。ぼくはこれまでに読んできた唯物論と弁証法に関する幾つかの書物と授業の内容に基づいて事前に論文をまとめました。その内容と流れを頭に入れ、試験の場で答案を書いた訳です。おおよそ下記のようなものでした。

---

認識論とは、最も素朴な定義を与えるなら、「人間が物事を正しく認識するのはどのようにしてか。そして、その仕組みはどうなっているか」ということを論ずる学問である。今までに多くの人々がこのことについて論じてきたが、それらは根本的立場の違いによっていろいろであった。

しかし、物事を正しく認識するという事は、あらゆる場合において一義的に規定されうる事だから、正しいものは一つしかない。すなわち、正しい根本的立場に立つものこそ正しいと言われねばならない。

我々にとって科学的認識の不可能なもの、たとえば「神」などというものは存在しない。なぜなら、我々が認識し、理解し得ないものは存在の意味を持たないからである。とすると、我々の認識能力が物事の存在を決定するかのように思える。すなわち、個人の経験的意識を超えた、超個人的な、いわゆる「先験的」意識というものをもって、認識を論じなくてはならないように思える。

しかし、この先験的意識というものが問題である。これが果して科学的に認識されうるであろうか。これは科学が未発達な時代に、不可解な現象を説明するために「神」という概念を導入したのと同じではないだろうか。

それゆえ、「物事は我々の認識能力によってその存在が決定されるのではなく、物事は本質的に存在し、人間は存在するすべての物事を認識できる」と考えるのが正しいと

思われる。これこそ正に人間の認識を論じる正しい立場なのである。

認識論が現れる時は必ず科学が盛んになっている時である。プラトン、アリストテレスの時代も、近世、近代もそうであったし、中世には認識論は現れなかった。認識論は科学とは切っても切れぬ関係にあるのである。すなわち、認識論は科学的認識の基礎を明らかにすることを動機として著されたのである。

例えばカントの「純粋理性批判」はニュートンの古典力学に対してそうであった。認識論は、科学がそれ自体何物にも支配されずに、独立に成立するものであることを主張しているが、これを当時の段階で固定化し、絶対化してしまった。

すなわち、一面では科学を正しくつかんでいるが、他の面では誤ってつかんでしまったのである。なんとなれば、科学は常に進歩発展しているものであり、固定的にはなく発展的に把握されねばならなかったからだ。

そして、カントにおいて現れているように、存在する物と人間の認識との間がどのように橋渡しされているかを見い出すことができず、科学的認識は物事自体を認識するのではなく、すべて意識の中で組み立てられるものであると考えざるをえなくなってしまった。すなわち、物事は人間の意識によってその存在が決まるという正しくない立場に立ってしまったのである。

科学者は常に唯物論的であり、科学は弁証法的である。アインシュタインが光の波動性と粒子性という二つの対立する事柄を統一に導いて光量子仮説を樹立し、真理に大幅に接近したことはそのよい例である。

よって、こういう性質を持つ科学について、その認識の基礎を明らかにするのもまた、唯物論的、弁証法的に行われなければならない。つまり、弁証法的唯物論の上に立って行われなければならないのである。

しかるに、弁証法的唯物論は科学的認識に到達するための方法を正しく示してはいるが、存在する物と人間の認識との間の橋渡しを見い出してはいないのである。しかしながら、これを見い出すことは、弁証法的唯物論においては不必要なことなのである。なんとなれば、認識の真理性の根拠は、客観的实在そのものの法則的現実性にあるからだ。

結局、認識論は観念論的な産物であり、科学の独立の地位を確立し、それをもって中世的宗教的支配から、人間の自由なる理性を解放することをもって、その任務を終了したのである。

-----

何とも稚拙な内容と表現だと言わざるをえませんが、20歳そこそこの普通の学生が論じるのはこんな程度のものでしょう。これでも合格の評価を頂くことができました。

これを書いた頃から50年以上の時が流れました。そして今の時代、西欧近代主義を基盤にした文明の行き詰りが鮮明に見えるようになりました。西欧近代主義の誕生から数えてみますと、400年を超える時が過ぎています。

こうしたことに考えを巡らしている中で浮かんできたのが、さきに紹介しました稚拙な論文だったのです。西欧近代主義も、何らかの成果をもたらしてその任務を終了したのかもしれないという想いが強くなってきたのです。

ぼくは、ベーコンやデカルト、ホッブスやロックに遡り始めました。そして今、ぼんやりとしているのですが、何かが見えてきたように感じています。そこで、デカルトに返り、彼の背中を追い掛けながら考えてみようと思ったのです。その道案内として選んだのが、「方法序説」だったのです。